本岡　武著

『インドネシアの米』

創文社　1975年　372ページ

I

インドネシアは，年間1500万精米トンの生産をあげる世界でも有数の米生産国である。この国における米の重要性は単にそれが国民の主食であるということにとどまらず，米価の動向が直接，国内の政治・経済の安定にも影響を与えるものとして古くから為政者の関心を引いてきたことにある。

本書は，このインドネシアの米問題を，いわゆるビマス（BIMAS）計画と呼ばれる米増産政策を中心にとりあげたものであるが，『本書の目的とするところは，米増産計画のドキュメントにとどまらず，それの批判にある。また，この増産計画を通して広くインドネシアの社会・経済構造の理解を，また米穀政策だけでなく広くインドネシア経済政策のあり方についての教訓を得たいことにある』（序論，22ページ）と述べられているように幅広い内容を含む。

本書は，著者が1968年10月から1年半にわたり，アジア開発銀行派遣のインドネシア農業省顧問としてジャカルタに赴任したのを機に着手されているが，著者の農業省顧問としての仕事が農業省の中枢ともいえる官房部局で行なわれたこともあり，本書に使用されている資料はきわめて広範・多岐かつ豊富である。しかしなんといっても本書の最大の特徴は，著者が農業大臣以下同省の幹部はもとより，末端の農民とも直接に接触して得た生の情報が随所に生かされ，これが著者一流の歯切れのよい文章でつづられていることにある。

評者は，著者が任期を了しジャカルタをはなれた直後の1970年9月から3年間，在インドネシア日本大使館で農業関係の仕事を担当する機会を得，この間1972年の干ばつに端を発した同国の米不足騒動に遭遇し，米に対するインドネシア人の執着心を身をもって体験したことから，本書については特に強い興味と関心を持って読ませてもらった次第である。

II

本書は次のような構成からなっている。

序　論
第1章　インドネシア経済における米
第2章　インドネシア米作の自然的基礎
第3章　インドネシア農業の特質
第4章　インドネシアの米の生産と流通
第5章　スカルノ政権の経済開発計画と米増産計画
第6章　スハルト政権と米増産計画
第7章　ビマス・ゴトンロヨン計画
第8章　改良ビマス計画
第9章　米増産計画の修正と第2の米危機
第10章　ビマス計画の評価と教訓
第11章　インドネシア米増産の展望
補論　第2次開発5カ年計画と米増産

III

第1章は，インドネシアの経済安定と米，経済に占める米の重要性の2節からなる。

ここでは，インドネシア経済に占める米の重要性が，単に食糧問題としてのみならず外貨収支を含む貿易問題，国民就業機会，国民所得形成など，国際経済および国内経済の視点からとらえられ論じられる。

第2章は，インドネシアの位置・面積・地形，気候条件，地質および土壌の3節からなり，米の生産・流通の背景としての自然的諸条件がやや専門的な見地から解説される。

第3章は，インドネシア経済における農業の重要性，農業の地域構造，農業の二重構造，経営規模と集約度，農業の土地所有関係，農業の専業・兼業別形態と過剰就業，家畜組成度の7節からなる。インドネシアの農業部門の特質と構造，さらには農業構造に占める米作の地位等が歴史的な経過と合わせて明らかにされる。

第4章は，米の生産，米の流通と消費の2節からなる。米の栽培，収穫，貯蔵という農業技術的問題の解説と，流通，消費の特質および構造が論じられる。

第5章は，スカルノ政権下の米増産計画とスハルト政権下の米増産計画との関連，経済緊急計画，第1次経済開発5カ年計画，8カ年総合開発計画，米増産3カ年計画およびパディ（米穀）・センター，ビマス計画の6節からなる。1950年以降のインドネシアの経済計画の概要とその中心をなす米増産計画のあらましが歴史的経過をたどって解説されるが，特に米増産計画の根本理念はスカルノ政権とは対照的なスハルト政権になっても依然存続していることが指摘される。

第6章は，ビマス計画の強化，米価騰貴と米危機，第1次開発5カ年計画と米増産計画の3節からなる。スハルト政権以降強化されたビマス計画の作期別実施状況と米の生産状況が検討され，1967年の干ばつによる米価騰貴とこの直後の1968年4月にはじまる第1次開発5カ年計画における米増産計画が解説される。そして，5カ年計画での60%という増加目標の設定は実行可能なプロジェクトからの積み上げではなく，インドネシア人の非現実性，観念性によって作られたものであると述べる。

第7章は，著者がいうところの本書のハイライトである画期的な外国会社参加による米増産計画「ビマス・ゴトンロヨン」について，計画の背景と動機，計画の勃興期，計画の興隆期，計画の最盛期，計画の終焉期，計画の評価に分けて，その内容が詳細に論じられる。この論点は単に米増産計画という視点にとどまらず，国内経済と政治の安定・発展という広範な立場がとられるが，この計画の導入も廃止もすべてインドネシア人的に行なわれたことが強調される。

第8章は，改良ビマス計画の背景，改良ビマス計画の発展の2節からなる。ビマス・ゴトンロヨン計画の中止を受けて発足し，ゴトン・ロヨン計画のアンチ・テーゼとして生れた改良ビマス計画の内容が紹介される。

第9章は，米増産計画の修正，第2の米危機と米増産目標の引上げの2節からなる。1970，71年と続いた米の豊作と第1次経済開発5カ年計画における米の生産目標値1480万トンの改訂(引下げ)，1972年の干ばつを受けて行なわれた再度の改訂（引上げ）等，1972年を境にくりひろげられた朝令暮改ともいえるインドネシアの米穀政策と米価の動きが第2の米危機として描かれる。

第10章は，岐路に立つビマス計画，ビマス計画の特質，評価，計画のあり方の4節からなる。ここで著者は再びビマス計画とは何であったかと問い直し，農民不在の高度補助金政策であり，「その矛盾あるいは特徴は，経済人的に行動しえないインドネシア農村社会に経済原理，特に契約精神を持ち込んだことにある」(287ページ）と述べる。

第11章は，至上命題としての米増産，米増産のプロジェクション，米作の将来の3節からなる。著者はここでインドネシア米作の将来見通しを質的な面から分析し，インドネシアにおいてはビマス計画のような直接的な増産計画ではなく，インフラ整備，農業技術開発，農民教育等による間接的な増産政策をとるべきであり，この方法をとれば，農民の勤勉さとあいまって米の自給達成も可能であろうと述べる。

そして最後に補論として，1974年4月にはじまった第2次経済開発計画における米増産計画が解説される。

Ⅳ

本書を通読したうえでの印象といったものを以下失礼をかえりみず記してみたい。

その第1は，本書はインドネシアの自然的条件から，米の栽培技術，消費・流通の実態，生産政策とあらゆる内容を詳細にわたって包含しており，インドネシアの米を中心とした農業事情を知るうえでこれにまさる著作はないといってよいであろう。

しかし，自然的条件や農業技術的な問題についての記述方法が明解な批評を加えつつ筆を進める生産政策等，後段の部分とあまりにも異なるため全体としてアンバランスな印象が残る。

その第2は，本書ではビマス・ゴトンロヨン計画等を中心とするインドネシアの米穀生産政策に対する評価や批判が随所でなされるが，その際著者は，インドネシア人の性格――衝動的で執拗性や一貫性に欠ける(172ページ)，楽観性・理想主義あるいは非現実性，存在と当為の混同（176ページ)――なるものに着目し，農業政策の立案，遂行，成否の大部分は，このインドネシア人的性格に由来すると述べる。農業省顧問として，農業政策立案者と肌で接触した著者ならではの観点と思うが，これをもってすべての施策を理解しようとすることには無理があるように思われる。施策を推進する人材が極端に不足していることや，ビマス計画を受け入れる農民の生産基盤の零細性などが分析の対象としてより深くとりあげられてほしかったと思う。1970年に訪イした世銀の農業調査団は，全国の45%を占める0.5ヘクタール未満農家には，ビマス計画に参加して融資を受けてもその返済能力はでてこないという分析を行なっている。本書においても，これら農業の生産構造等の観点からビマス計画が本来経済的にフイージブルなものであったのかどうか等について客観的分析がなされてよかったのではないかと思う。

第3は，インドネシアの米作の将来見通しについてであるが，自給を達成するため今後はインフラ整備等間接的な増産方法に施策の重点が置かれるべきであるとの論については評者もきわめて妥当なものと考える。

（農林省農蚕園芸局　杉本忠利）